

## B. 授 業 研 究

都築 亨 酒井為久 柳田嘉久 富田 昇 北田明子

\*鈴木 孝 宮田 学 飯島幸久 矢木 修 \*\*伊藤悟由

### アンケート——授業及び授業の周辺——の調査結果

酒 井 為 久

#### 1 研究意図と経過

私達が、授業というものについて考えるとき、授業内容の軸である教材を手がかりとすることが多く、従って、教科の枠内で考えようとする傾向が強いのである。換言すれば、特定の教科を構成する教材内容の学習と指導の経過を、授業と称して、授業というものを把握するのが普通である。

授業というものについての、そういう常套的な発想から離れて、中学と高校の授業研究を試みようとするならば、教科の枠を超えたところで授業を検討するための手段をあれこれ考案する必要が生じてくる。そうして案出された研究方法の多くは、既設されている教科にはとらわれないものの、新しく統合整理された教育内容を軸としている点、在来の発想の変形に過ぎないものが多いようである。

この研究報告のねらいは、授業からその軸である教材内容やその指導法を取り外したと仮定して、その上で、授業というものについて検討してみようとするのである。授業の核に相当する部分を消去した上での研究をねらいとしている点から、授業の周辺の問題を課題にした授業研究であると、当研究グループでは考えたのである。

授業の周辺という表現が意味するところの一つは、授業時間内における、教材内容と密接に関連する要素を除外した、残りの部分を指すことである。いわば、授業の内周辺の問題がそれである。もう一つは、授業の外周辺の問題であって、授業時間外において授業を支えているところの諸要素を指すのである。この内周辺と外周辺を合せて、周辺と表現したものである。

当研究グループが、本校で行われた研究協議会（57年10月29日）で研究発表した際の発表要旨では、この研究の意図を次のような比喩をもって説明している。

授業というものを、建築現場にたとえると、授業の周辺の問題は、建築のための足場に相当するだろう。

建築過程にとどこおりが起きた時、その原因を究明することになる。通常の場合、設計図や資材などに原

因を見出す。

ところで、その原因が通常の場合のようではなく、不明確な場合がある。それは、授業において、全体的・ムード的に、向上力や自制力が欠けている場合が一例である。

そうした場合、授業の周辺の問題として原因究明するがよいと考える。

その手初めとして、建築の足場に相当する、授業の周辺の問題の実態調査をアンケートの形で、本校の中・高生を対象にして行ってみた。そこから、授業全般にかかわる問題点や、本校単独の問題点が分析できればと考えた。

いずれにせよ、建築のための足場を問題にすることは、その必要性が、建築物に相当する授業過程そのものに存在する筈である。

さて、授業の周辺の問題を具体的に列挙すると、次のようなものであろう。(1)授業の好き嫌いについて。(2)有効な授業とそうでない授業について。(3)予習や復習について。(4)教室の中の座席について。(5)学級内の人間関係について。以上のようなものを思い浮かべる次第であるが、研究の段取りとしては、授業の周辺研究のねらいに沿った実態調査から開始すべきであるとの結論を得た。

最初に、本校の中・高生全員を対象にした、アンケートによる実態調査を実施すれば、その結果の分析から逆に問題の所在も明確になり、研究のねらいが確認できるように思われたのである。ということは、参照すべき同様な研究成果がほとんどなかったことを意味している。

実際のところ、授業の周辺の問題という主題についての、研究グループとしての共通理解のようなものが成立したのは、先に記した研究協議会の直前になってからである。それまでは、教科の枠内でそれぞれの教材内容を学習し指導する、従来からの授業研究を想定しており、授業の周辺を研究することの意義を積極的に認めがたい雰囲気であった。

実状を言えば、研究協議会の日程に追われ、ともかくも実施したアンケート調査が、新しい領域の所在を明らかにしてくれたのである。そして、目新しいという意味で大層面白い結果が出たように思うが、授業研究としては特殊であり、本校生を対象とする範囲の研

教員移動により昭和58年4月より

\* 県立熱田高校

\*\* 県立一宮興道高校

究では、以下に述べるアンケートの結果分析より以上の成果は導き出せないのではないかとも思われた領域である。

アンケート調査は、57年7月に、本校中学生（1学年2学級、計6学級）と本校高校生（1学年3学級、計9学級）全員を対象にして実施した。アンケート項目の作成は、当研究グループの都築亨が担当した。予備調査等を実施した上で作成したのではなく、当グループ員全体の協議による多少の標準化への努力を加味して出来上がったものである。中・高別で、用紙一枚にそれぞれが収まるように工夫した。

アンケート結果の集計と分析は、冨田昇と柳田嘉久が行い、矢木修が援助した。この段階で、アンケート項目を補正する方が妥当と認められた点は、折り込んでまとめてみた。酒井為久は、推論の部分と研究協議会当日の発表およびこの報告の記述を担当した。この報告は、前述した研究協議会の発表をまとめたものであり、当研究グループの研究としては、その一部分に該当するものである。（当日、この他に4テーマの発表を行った。）

研究協議会に至るまでの約2年間、定期的に研究活動してきたグループ員は、都築亨・酒井為久・柳田嘉久・冨田昇・北田明子・鈴木孝・宮田学・矢木修・飯島幸久・伊藤悟由である。研究協議会当日については、本学教育学部江藤恭二教授の助言をいただいた。

## 2 アンケート項目

### 《中 学》

A 科目の中で、最も好きな科目は何ですか。また、きらいな科目は何ですか。

1. 国語 2. 社会 3. 数学 4. 理科
5. 音楽 6. 美術 7. 保体 8. 技家
9. 英語

B 好きな科目としてあげた理由は何ですか。次の中から番号で答えなさい。

1. 小学校のころから好きだった。
2. 得意な科目である。
3. 最近興味が持てるようになった。
4. 先生がよいので好きになった。
5. 以前に教えてもらった先生のおかげ。
6. 内容がよくわかる。
7. 成績がよくなった。
8. 友達や席の近くの人の影響で。

C きらいな科目としてあげた理由は何ですか。次の中から番号で答えなさい。

1. 小学校のころからきらいだった。
2. 不得意な科目である。
3. 最近興味が持てなくなった。
4. 先生がきらいだから。
5. 以前に教えてもらった先生がきらいだから。
6. 内容がわからない。
7. 勉強しても成績が上がらない。
8. 友達や近くの席の人のせい。
9. 何となく。
10. その他。

D 科目の中で最も大事だと思っている科目は何ですか。上の1～9の番号で答えなさい。

E 科目の中であまり大事でないと思う科目は何ですか。上の1～9の番号で答えなさい。

F 大ていは予習することになっている科目は何ですか。時間をかけている順番に上の1～9の番号で答えなさい。

G 家で勉強する時の自分の勉強のしかたは次のどれにあたりますか。番号で答えなさい。

1. 大体一定の時間に同じペースでやる。
2. やってはいるが気の向く時に。
3. やり方がわからない。

### 《高 校》

A 全科目の中で、最も好きな科目は何ですか。また、最もきらいな科目は何ですか。それぞれ次の中から選び、その番号を書きなさい。

1. 国語現代文 2. 国語古漢 3. 倫社
4. 地理 5. 日本史 6. 世界史
7. 政経（現代社会） 8. 数学 9. 物理
10. 化学 11. 生物 12. 地学 13. 音楽
14. 美術 15. 書道 16. 保健 17. 体育
18. 英語R 19. 英語GC

B 好きな科目としてあげた理由は何ですか。次の中から番号で選んで答えなさい。

1. 中学校の時から好きだった。
2. 得意な科目である。
3. 最近興味が持てるようになった。
4. 先生がよいので好きになった。
5. 以前に教えてもらった先生のおかげ。
6. 内容がよくわかる。
7. 成績がよくなった。
8. 友達や席の近くの人の影響で。

9. 何となく。
10. その他。

C きらいな科目としてあげた理由は何ですか。次の中から番号で選んで答えなさい。

1. 中学校の時からきらいだった。
2. 不得意な科目である。
3. 最近興味が持てなくなった。
4. 先生がきらいだから。
5. 以前に教えてもらった先生がきらいだから。
6. 内容がよくわからない。
7. 勉強しても成績が上がらない。
8. 友達や近くの席の人のせい。
9. 何となく。
10. その他。

D 科目の中で最も大事だと思っている科目は何ですか。上の1～19の番号で答えなさい。

E 科目の中であまり大事でないと思う科目は何ですか。上の1～19の番号で答えなさい。

F 大ていは予習することにしてしている科目は何ですか。時間をかけている順番に上の1～19の番号で答えなさい。

G 家で自分が勉強する時(予習復習)勉強のしかたは次のどれにあたりますか。次の中から番号で答えなさい。

1. 大体一定の時間に同じペースでやる。
2. やってはいるが気の向く時に。
3. やり方がわからない。

H 決まって復習する科目を、上の1～19の番号で答えなさい。

### 3 調査結果の分析

最初に、調査結果にみられる顕著な傾向について、まとめておきたい。

まず、好きな科目については、中学・高校ともに以前から得意で興味をもっていることがわかる。どうして得意とする科目になったかの理由は、今回のアンケートだけでは不鮮明であるが、科目に面白味を感じる感じ方は、高年令になるにつれて、内発化していくようだと推定している。

次に、きらいな科目については、中学・高校ともに以前から不得意で内容がわからず、その科目の先生もきらいという傾向がでている。内容がわからなくなる

原因は、授業がむつかしくなるにつれて、その科目の勉強が進まなくなることもあり、また、その科目の内容に親しめなくなることである。

さらに、好きな科目はバラついているが、大事と思う科目は、中学・高校ともに国語・数学・英語に集中している。好きな科目が多在化しているのは、生徒の個性と密接に結びついているからと考えられるが、大事と思う科目が三教科に集中しているのは、上級学校の入試との関連等、生徒を取り巻く状況が与えた価値観であろう。

また、中学において、きらいな科目はバラついているが、大事でないと思う科目は美術・音楽となっている。高校では、きらいな科目はバラついているが、大事でないと思う科目もバラついている。きらいな科目が多在化しているのは、生徒の人間性がより顕著に表出された結果であろう。高校で大事でないと思う科目が多在化しているのは、大学入試科目との関係もあろうが、それをも含めてやはり生徒の個性の自然な反映であると考えたい。同時に、自己理解ができるところまで成長した証明であるともいえる。

なお、本校の中学生・高校生の家庭における勉強のしかたは、勉強はやってはいるものの気の向く時にやり、予習としては数学と英語だけやるのが平均像である。この家庭学習の姿勢は、そのまま学校における授業に結びついており、受動的な消極的な授業風景となっていく。一言で表現すれば、中間層の生徒が集合した学校である。特に中学においてその感が強く、その傾向がそのまま高校へ連続している。

アンケートにみられる、以上のような顕著な傾向について書き並べてみると、それらは平常、私達を感じていることを新たに確認したに過ぎないことがわかる。授業を通して把握している生徒の実態(全体傾向)と同じである調査結果を、もう少し時間をかけてながめてみよう。そうしていると、角度の変わった授業観が浮き上がってくる。

それは、教材とその指導法の分野からの授業観ではなく、授業の周辺の分野から授業を検討する見方である。教科の枠を超えて、

- (1) 授業のくずれ目
- (2) 授業の成り立ちにくさ
- (3) 授業の成果が上がらぬこと

の理由や原因を究明する素材として、アンケートの調査結果を生かすことができる。

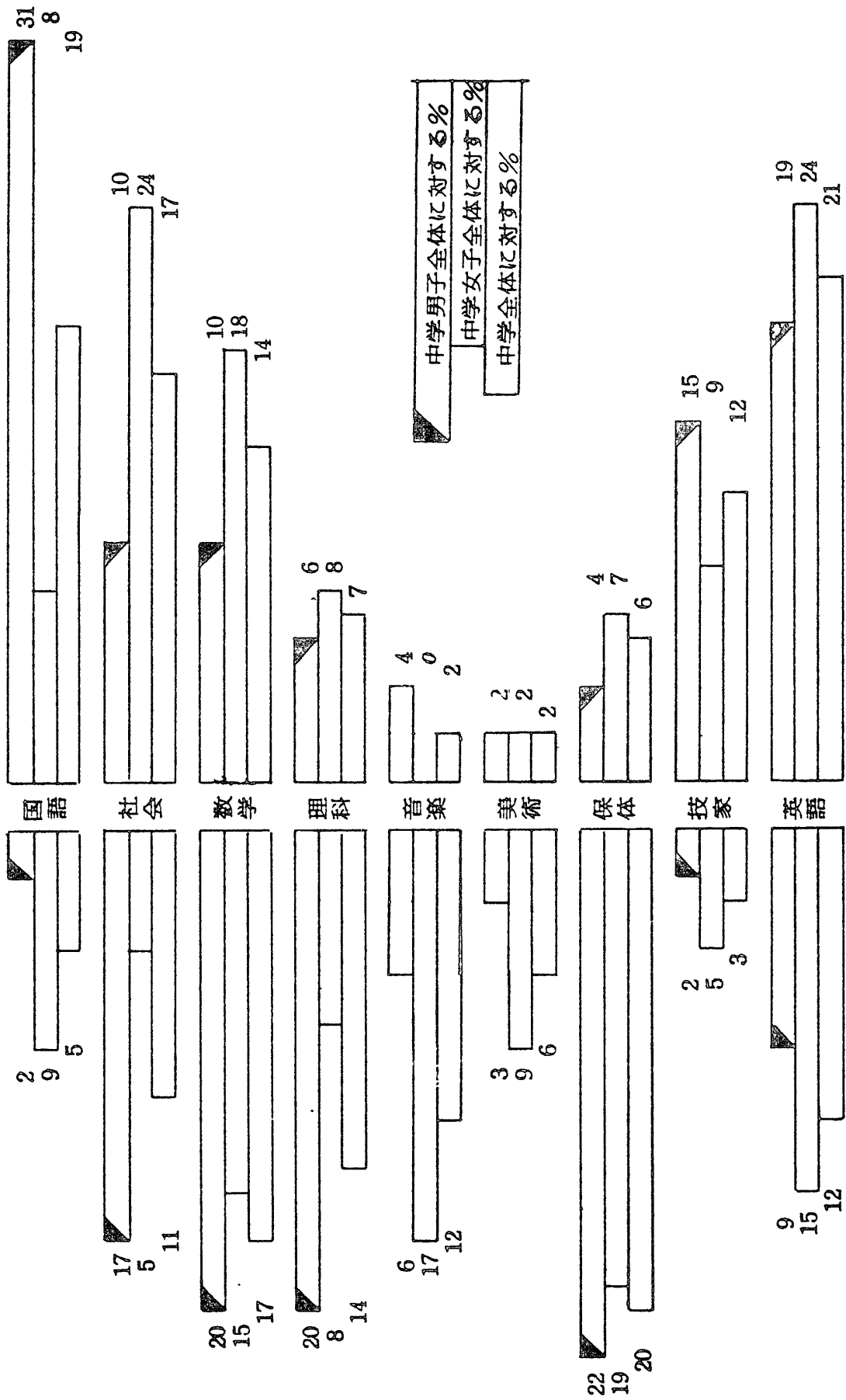
教科の枠を超えた授業研究として、手さぐりの状態で、以下の調査結果の分析を見つめたのである。

表中の数字はすべて%表示である。

《中 学》

表 I (好きな科目)

(好きな科目)



表Ⅲ 〔きらいな科目とその理由〕 (中)

	1 男女	2 男女	3 男女	4 男女	5 男女	6 男女	7 男女	8 男女	9 男女	10 男女	学年 別	各 学年
国語	4 1 8 2 2 1	5 1	2 2 3 1	2 2 3 1	2 2 3 1	2 2 3 1	2 2 3 1	2 2 3 1	2 2 3 1	2 2 3 1	10 2 10 2 10 5	18 15 22
社会	2 5 2 9	1 2	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	1 2 3 4	5 12 5 8 5 4	26 19 6
数学	1 5 5 7	1 2 1	1 1 2	1 1 2	1 1 2	1 1 2	1 1 2	1 1 2	1 1 2	1 1 2	2 5 4 7 2 6	11 17 14
理科	1 2 1 1	1 2 2	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	3 3 1 1 3 4	10 1 11
音楽	2 1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	2 1 1 1 1 1	4 1 1
美術	1 1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 1 1 1 1 4	1 1 4
保健	1 1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 1 1 1 1 2	1 1 4
技術	1 1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 1 1 1 1 2	1 1 4
家庭	1 1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 1 1 1 1 2	1 1 4
英語	1 1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 2 2	1 1 1 1 1 2	1 1 4
学年別	7 9 8 15 3 1	5 2	1 2 3 4 5 2	1 2 3 4 5 2	1 2 3 4 5 2	1 2 3 4 5 2	1 2 3 4 5 2	1 2 3 4 5 2	1 2 3 4 5 2	1 2 3 4 5 2	1 1 1 2 1 3 1 1	19 6 11
各学年	23 10 11	35 27 33	6 5 6	11 15 11	1 4 1	10 11 15	7 19 13	6 8 7	1 1 4	1 1 4	1 2 3 1 2 3 1 2 3	5 13 26

〔理由〕1. 小学校の時から 2. 不得意な科目 3. 最近興味が持てなく  
4. 先生がきらい 5. 以前に教えて 6. 内容がよくわからない  
7. 勉強しても 8. 友達や近くの 9. 何となく 10. その他

表Ⅱ 〔好きな科目とその理由〕 (中)

	1 男女	2 男女	3 男女	4 男女	5 男女	6 男女	7 男女	8 男女	9 男女	10 男女	学年 別	各 学年	
国語	2 1 1	2 1 1	2 1 1	2 1 1	2 1 1	2 1 1	2 1 1	2 1 1	2 1 1	2 1 1	2 3 4 2 3 7	2 8 7	
社会	1 1 1	2 3 1	3 1 1	3 1 1	3 1 1	3 1 1	3 1 1	3 1 1	3 1 1	3 1 1	4 2 6 2 8 2	8 11 14	
数学	9 6 3 2	2 3 1 2	2 3 1 2	2 3 1 2	2 3 1 2	2 3 1 2	2 3 1 2	2 3 1 2	2 3 1 2	2 3 1 2	7 5 6 4 7 6	18 14 20	
理科	9 3 4 1	3 2 2	3 2 2	3 2 2	3 2 2	3 2 2	3 2 2	3 2 2	3 2 2	3 2 2	4 2 9 2 6 4	8 18 15	
音楽	2 8 2 5	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	5 5 2 6 4 6	7 13 15	
美術	1 4 1 2	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	2 4 4 4 2 1	7 6 3	
保健	8 14 6 3	2 2 1	2 2 1	2 2 1	2 2 1	2 2 1	2 2 1	2 2 1	2 2 1	2 2 1	11 8 8 5 3 5	29 20 13	
技術	1 1 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 3 7 2 2	2 7 2	
家庭	1 1 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	5 7 1 3 3 5	18 6 11	
英語	1 1 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	2 2 2	3 2 5 1 2 2	18 6 11	
学年別	17 16 12 14 6 8	3 9 6 3 1 1	2 2 3 1 2 3 1 2	2 2 3 1 2 3 1 2	2 2 3 1 2 3 1 2	2 2 3 1 2 3 1 2	2 2 3 1 2 3 1 2	2 2 3 1 2 3 1 2	2 2 3 1 2 3 1 2	2 2 3 1 2 3 1 2	2 2 3 1 2 3 1 2	1 1 1 2 1 3 1 1	1 2 3 1
各学年	51 39 31	18 20 18	7 14 17	10 2 6	1 4 2	4 5 3	1 1 1	5 15 16	2 1 6	2 1 6	1 2 3 1 2 3 1 2 3	1 2 3	

〔理由〕1. 小学校の時から 2. 得意な科目 3. 最近興味が持てる  
4. 先生がよい 5. 以前に教えて 6. 内容がよくわかる  
7. 成績がよく 8. 友達や近くの 9. 何となく 10. その他

表Ⅴ 〔きらいな科目と大事でないと思う科目〕 (中)

	国語 男女	社会 男女	数学 男女	理科 男女	音楽 男女	美術 男女	保体 男女	技家 男女	英語 男女
国語	1・0	1・0	・2 1	2・1	7・3	13・4 8	5・1 3	1・1 1	2・1 1
社会		2・2 2	3・1 2	・2 1	3・1 2	2・13 7	・1 0	・3 2	2・1 1
数学		・2 1	3・1 2	・1 0	2・2 2	2・7 5	3・1 1	1・4 2	・1 0
理科				2・1	2・1	1・4 2	1・1 1		1・1 0
音楽					3・1	1・1 0	1・1 0		
美術					1・0	1・1 1	1・1 0		
保体				1・0	2・2 2	・3 2	2・2 2		・1 0
技家		1・0		1・1 1	5・2	5・5 5	・2 1	2・2 2	
英語	・1 0	1・1 1	・1 0	2・2 2	3・5 4	5・8 7	2・2 2	3・1 2	3・2 3
学年別計(全)	・ ・ 1 1	1 2 1 4 5	3 2 1 5 5	1 ・3 6 7 7	13 8 6 27 18	9 10 9 29 39	4 4 5 14 11	2 3 2 6 10 8	2 3 1 2 3 6 7
各学年	・ ・ 3	5 6 3	7 4 3	2 5 14	18 23 13	39 37 41	12 9 13	10 10 5	7 6 6

表Ⅳ 〔好きな科目と大事と思う科目〕 (中)

	国語 男女	社会 男女	数学 男女	理科 男女	音楽 男女	美術 男女	保体 男女	技家 男女	英語 男女
国語	・2 1	1・2 1	・3 2						1・2 1
社会	4・2 3	2・1 1	5・2 4				1・1 1		6・ 3
数学	6・4 5	4・2 3	8・4 6					・1 0	3・4 4
理科	4・2 3	2・1 1	4・2 3	1・ 0			2・1 1	2・ 1	6・2 4
音楽	1・3 2		・9 4	・1 0			・1 0	・1 0	2・2 2
美術	・4 2	・1 0	1・1 1				1・1 1	・1 0	2・2 2
保体	2・6 4	1・1 1	8・6 7				2・2 2	1・1 1	9・4 6
技家	1・2 1		・2 1	1・ 0					・2 1
英語	2・3 3	・2 1	2・6 4		1・ 0			・1 0	5・3 4
学年別計(全)	7 6 6 20 24	2 2 4 9 8	10 10 8 28 31	・ 2 ・ 2 1	・ 1 ・ 1 ・ 0	・ 1 ・ 1 ・ 1 0	1 3 5 14 5	2 1 1 2 3	10 9 15 34 27
各学年	30 29 14	6 7 10	30 29 34	・ 4 ・	・ 1 ・	・ 1 ・	5 8 1	7 1 1	21 21 40

表Ⅶ 〔予習する科目と家での勉強のしかた〕 (中)

	1 (一番目)		2 (二番目)		3 (三番目)		学年別計	
	男	女	男	女	男	女	男	女
国語	1	5	3	5	1	2	3	7
社会	2	2	8	3	2	1	6	1
数学	8	8	14	16	1	6	6	13
理科								
音楽								
美術								
保健								
英語	11	17	28	19	4	5	13	12
なし	6	3	6	5	6	3	4	2
学年別計	27	32	59	48	13	19	1	年
								2
								3
								計

〔勉強のしかた〕 1. 大体一定の時間に同じペースでやる  
 2. やってはいれるが気の向く時に  
 3. やり方がわからない

アンケート調査の弱点は、答えが限定されるのが普通であり、適切なものがない場合でもどれかにマークされる点である。また、アンケートの項目ごとに、生きているマルゴトの人間が分解されて、それが実態として把握される点である。

表Ⅰから表Ⅶまでをながめて、なすべきことは、予備調査による標準化なしのアンケート調査項目の弱点を考慮の上で、授業における平均的な幾類型かの生徒像を復元していくことである。そのためには、本校における授業の実態そのものを加味することが必要であって、表Ⅰから表Ⅶまではその裏付けとして利用したとも言える。

さて、授業における生徒像であるが、次のような属性をもつ生徒について考えてみたい。

好きな科目がいくつかあり、特にきらいな科目はないか、もしくはきらいな科目の原因がはっきりしている。それぞれの科目について、その大切さがわかっており、自分のペースで勉強を進め、授業に対する姿勢が前向きである。授業内容を先取りしようとする態度が他の生徒により影響を与える場合、その生徒の存在が授業を押し上げる作用となって働く。そういう生徒を上位者と仮定しておく。

逆に、好きな科目がはっきりせず、何となくきらいな科目ばかりであり、大事な科目であるのかどうかも

よくわからない生徒がいる。勉強については積極的な関心がなく、授業に対する姿勢が下向きである。ある意味では、教室内の授業において安定した動きの少ない生徒である。そういう生徒を下位者と仮定しておく。

その中間層に、好きな科目やきらいな科目についてははっきりした意見をもち、大事な科目や大事でない科目についてよくわかっていながら、気の向くときにしか勉強しない、易きに流れる傾向の生徒が位置する。授業に対する姿勢は受動的で、授業の流れを引き下げる方向に作用する存在である。しかも、常に揺れ動く状態にあり、授業構成者の多数派である。

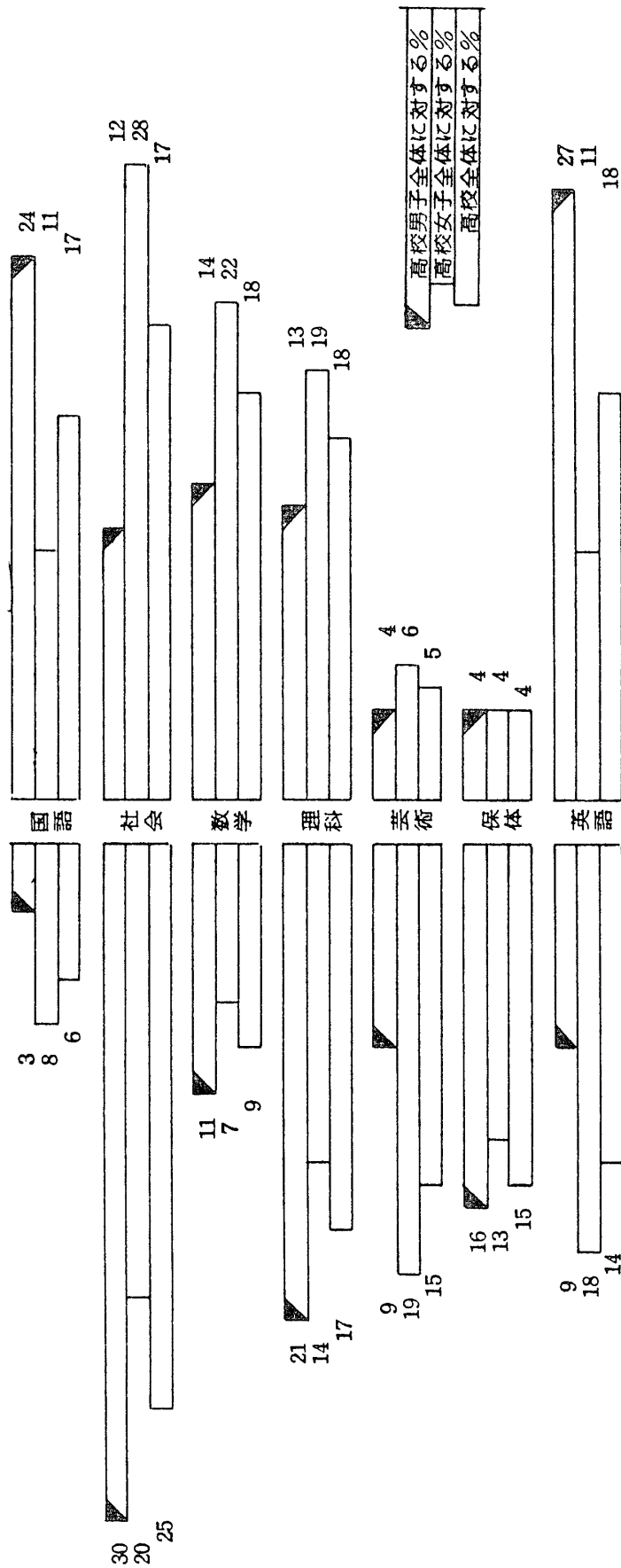
単純化すれば、以上の三者によって構成されるのが授業であり、それらの人間的相互作用によるグループダイナミックスが授業そのものであると言っている。そういう基盤の上で、指導者である教師は、全体を引き上げようと努めるのであるから、個々の生徒のもっているエネルギーと、それが相互に相関し合う作用を見きわめることがどうしても必要となる。

本校にあっては、入試選抜制度の影響から授業構成者である生徒が正規分布曲線にならず、授業成立基盤が低落化している。授業にとって最も問題になる中間層の生徒の増加により、教材とその指導法以前の授業の周辺の問題を多くかかえるようになってきたのである。

《高 校》

〔好きな科目〕

表Ⅶ 〔好きな科目〕







表Ⅱ 〔「好きな科目と大事でないと思う科目」〕 (高)

	国語		社会		数学		理科		芸術		保体		英語		学年別計		各学年
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
国語	10	3	2	3	1	1	2	3	2	0	1	0	6	3	2	3	17
社会	2	3	6	8	1	4	1	2	2	6	1	1	2	3	4	6	13
数学	2	3	1	4	1	5	2	8	6	6	2	0	1	1	10	15	31
理科	3	2	3	1	1	3	3	8	1	2	1	1	1	1	2	5	9
芸術	2	0	1	0	1	1	1	2	2	3	1	0	1	5	2	2	9
保体	1	0	1	0	1	0	1	0	1	1	1	1	1	2	0	0	3
英語	6	3	5	0	3	0	1	1	10	4	2	3	3	14	3	19	19
学年別計	6	3	10	16	1	5	4	10	20	11	3	1	2	1	1	1	17
学年	10	8	20	38	7	18	5	18	38	20	5	2	2	1	1	1	17

表Ⅲ 〔「好きな科目と大事と思う科目」〕 (高)

	国語		社会		数学		理科		芸術		保体		英語		学年別計		各学年
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
国語	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	2	5	3	6	6
社会	2	2	2	2	8	1	1	0	1	1	14	15	14	10	4	19	19
数学	1	1	2	1	5	1	0	0	1	1	4	5	5	6	1	10	10
理科	0	1	1	1	6	3	2	1	1	1	7	6	7	7	3	13	13
芸術	2	4	1	1	4	6	1	1	1	1	4	9	6	8	12	27	27
保体	1	1	1	1	1	2	1	1	2	2	2	2	2	4	2	8	8
英語	3	2	1	1	4	3	0	1	3	12	8	3	8	4	8	16	16
学年別計	5	6	4	4	13	9	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	17
学年	14	8	8	11	30	20	4	4	4	4	4	4	4	1	1	1	17

表 VII (高)  
〔復習する科目と家での勉強のしかた〕

	1 男女		2 男女		3 男女		学年別男女計	
	男	女	男	女	男	女	男	女
国語	• 1	0	4	4			4	2
社会	1	1	6	3	2	•	1	1
数学	8	9	33	20	3	2	18	15
理科	• 1	0	8	4	• 2		8	1
英語	9	13	23	38	4	6	16	20
学年別計	11	11	34	5	8	8	8	13
	6	7	31	30	2	1	12	23
	8	9	21	19	1	1	8	13
	5	8	20	18	6	6	16	20
	18	24	73	68	8	8	18	24

〔勉強のしかた〕の1・2・3は、  
予習の場合と同じ

表 VII (高)  
〔予習する科目と家での勉強のしかた〕

	1 男女		2 男女		3 男女		学年別男女計	
	男	女	男	女	男	女	男	女
国語	2	2	5	11	1	1	7	1
社会	2	3	5	1			1	•
数学	9	16	41	44	8	9	16	28
理科	1	•	1	1	• 1		1	•
保体			• 1	0			•	•
英語	4	2	19	7	4	1	14	9
学年別計	6	8	28	26	4	4	8	5
	7	6	20	21	5	3	11	12
	3	9	22	16	5	6	11	15
	16	23	64	64	14	13	21	24
	8	8	25	29	8	11	25	29
	15	23	72	64	12	13	25	35

〔勉強のしかた〕 1. 大体一定の時間に同じペースでやる  
2. やってはいれるが気の向く時に  
3. やり方がわからない

以上の、本校における調査結果のうち、本校独自の部分がどのくらいで、一般共通の部分がどれほどであるかということは、比較対照すべき他校におけるアンケート調査を実施していないので、よくわかっていない。その点、他校との比較資料となる、中学では中統テスト(業者テスト)、高校では卒業生の進路状況を利用して補ってみよう。

それによれば、本校の中学(1学年2学級)は平均的な中学より上位者が少なく、同時に最下位層は存在せず、中間層が非常に厚いという特徴がある。また、本校の高校は、その2/3の生徒が本校の中学からそのままほぼ全員進学している関係で、平均的な愛知県の普通科公立高校のように輪切りされて等質化した生徒が在学するわけではなく、一学年3学級の小規模校であ

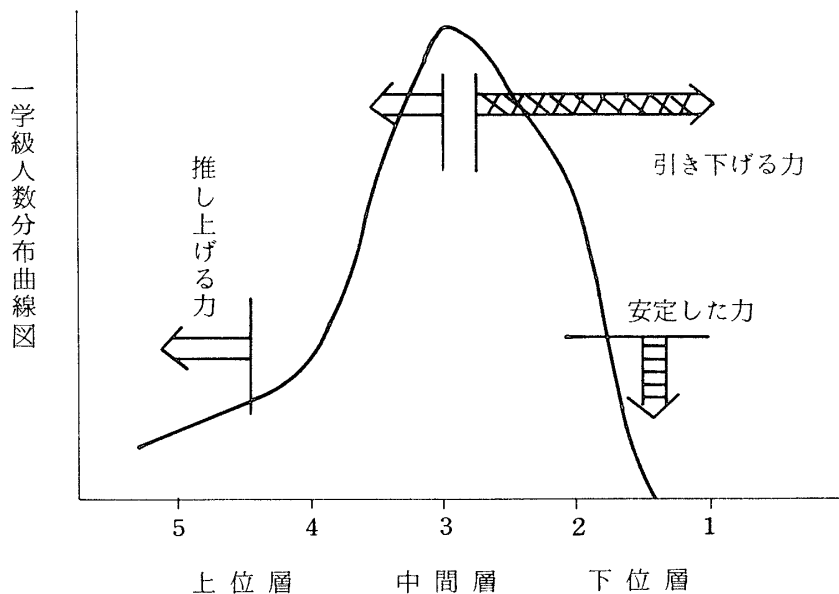
りながら、上位者から下位者までそろった幅広い生徒構成になっている。中学に近い生徒構成の普通科高校である。

このような本校の特徴を、アンケートの調査結果と重ね合わせてみると、授業の周辺の問題については、中学と高校を一本化して考えてよいように思われてくる。ただし、高校において生徒が目的意識を持ちながら授業に対しているところのみ、両者が相違している。

表Ⅶから表ⅩⅢまでをながめていて、結局のところ、授業の周辺の諸問題は、生徒の授業にのぞむ意識とそれらの相互作用の問題とに還元できるように思われてきた。

#### 4 推論・授業というものの基盤

##### 《 中 学 》



これは、授業の単位である一学級の生徒を、アンケート調査の結果と、本校の中学の授業について考察した結果とを総合して、模式的に分布させた図である。授業を押し上げる力が生徒集団の中に内在していることは、経験を通して理解しているところである。教師は、授業を引き下げる力と対抗して授業を進めているわけであるが、思いは高く行いが伴わない中間層が多ければ引き下げる力が強く働くことになり、授業が低落化するのである。

授業の最大の問題点は、この点であり、授業の低落化現象と生徒の非行や問題行動の増加とは平行してい

くようである。本校中学の入学選抜が完全抽選となり、そのことが地域社会に浸透するにつれ、ここ数年、中間層の生徒が増え続けており、授業を引き下げる力の所在を毎日肌で感じているのが、私達の学校の現状である。

下位層の生徒は、職業指導等が必要であり、画一的な中学の授業に付いて行きにくいという意味で安定した様相を呈示する。というような区分法は、授業内容の理解度による生徒区分である。従って、区分法を変更して、技能の修得を目的とした授業における生徒の位置付けを試みれば、別種類の図が出来上ることにな

るが、現在の中学校教育の主流に沿わないものは割愛して考えることにしたのである。

次に、高校の図について解説する。

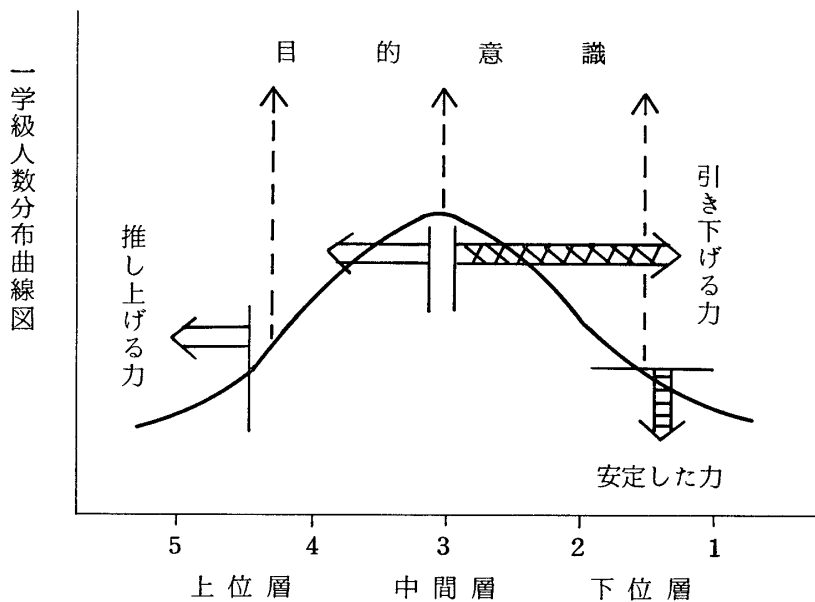
前述したように、本校の高校は中学の引き続きであるが、高校入学時に全体の1/3に当る生徒が外部中学から入学してくる関係で、一学級内の分布曲線は正規分布曲線に近づくようである。表中に、点線で上向きに記入した矢印は、高校生になり生徒各自が目的意識をもって授業に取り組めるようになった様を示した。

目的意識を、通俗的でわかりやすく換言すれば、下位層のそれは就職であり、上位層のそれは難関国公立大入試である。本校の特色は、そういう目的意識が幅広く混在していることである。今日の高校教育が輪切

りにした、比較的等質な生徒を対象とするのと対照的な状態である。

輪切りされた生徒は、それぞれがほぼ等しい目的意識をもって授業に臨んでおり、表の左右に働く、推し上げる力や引き下げる力を、目的意識が弱めているようであるが、集団内で作用する力は単調で極端になる傾向もあるように思われる。本校のような場合は、図の左右に働く力が作動しやすく、目的意識に向けて引き上げる力は、逆に弱められている。指導者としては、中学の授業で感じるのと同様な、おもしろみはあるが授業しにくさもあるとの感想をもち、一般の高校の授業らしさが欠けるように思われるのである。

### 《 高 校 》



授業の周辺の問題について、先に、建築にたとえて建築の足場に相当する問題であると書いたが、アンケートの調査結果の分析を経て、授業というものについて推論するに至って、足場ではなく建築する場所、即ち地盤に相当するものが授業の周辺の問題であると考えられるようになった。生徒の意識や意欲の在り方とそれらの教室における相互作用という地盤の上に、教材内容とその指導法という授業が組み立てられていくのである。

換言すれば、授業の周辺の問題は授業を取り巻く人間的要素の問題となる。授業に係わりをもつ指導者側の問題については、意図的に考慮の外において推論した結果、授業を構成する生徒集団の中で働く作用の在

り方が、最も重要な課題であるとの結論となった。図で示したのが、それである。

私達は、授業の基盤である周辺の諸問題を直視することにより、基盤そのものの強化や変革の試みを、有効に行いうる見通しを得たように思う。少なくとも、授業というものに対して抱いていた教科万能主義の幻影をはらいのけることができたこと、これが今回のアンケートの調査結果の成果である。

建物にたとえた授業というものは、その痕跡を地盤の上に残して消えて行く一過性のものと思われ、逆に、周辺の問題であると思われた授業を支える基盤の方に、真実な問題が含まれていたというのが、教科の枠を超えた授業研究から見出した結語である。